



2016年12月18日発行
No.40
早稲田大学本庄高等学院通信

発行：早稲田大学本庄高等学院 発行人：吉田 茂 〒367-0032 埼玉県本庄市栗崎239-3 ☎0495-21-2400 【URL】 <http://www.waseda-honjo.jp>

チヨモランマは見えなかった

学院長 吉田 茂



8月5日後ろ髪を引かれながら羽田を飛び立った。初めてのネパールへの旅は心の踊る旅ではなく、ネパールでお会いする人々が、今回のスタディツアーの代表者である長谷川まりこさんがその著『少女売買』で伝えるところの、あるいは誘拐され、あるいは親に売られ、あるいは親もろとも騙され、インドやスリランカ等の売春宿で働かされた女性たちであることだ。10代の少女も多いという。その少女たちが春を謳ぐのは、これも貧しいその土地の男たちだから、その少女たちの行く末は知れたもの、売春宿の経営者になるのがやっとで、働かされた挙げ句身体を壊して死ぬか、HIVに感染し、その後AIDSを発症して死ぬか、命永らえても、病気になる道端に捨てられるのがおちだ。それらの少女を政府とともに救出し、精神の回復や識字教育、職業訓練を含めた教育を行なおうとするのが、ネパールのNGO組織「マイティネパール」である。そこを訪問し学習するのが今回の旅の目的だ。その時の気の重さとは、その女性たちは男そのものを嫌うのではない。また、見知らぬ日本という国から興味本位で来たに過ぎない子どもと忌避されるのではないか、そのような極めて自意識過剰な想念からくるそれであった。

首都カトマンズでも凸凹だらけの舗装路であり、数年前に日本が設置した信号機は、今はうず高く土埃をかぶって眠ったまま。旧王宮付近の道路には車が溢れ、そこかしこでクラクションがけたたしく鳴っているが、その音の割にはネパールの人々は愚直なまでに穏やかである。訪問先の人々も何も知らぬ我々を暖かく迎えてくれた。ネパールの人々の娯楽の一つはピクニックであるという。有料の公園に行き散策したり、そこで食事を摂ったり、手品で遊んだり、ダンスをしたりして楽しむのである。訪問先の交流相手の中には生涯初めて経験するピクニックだという人もいた。その人たちはダンスが大好きだ。古びたオーディオシステムからビートのきいたネパール音楽が流れると、誰彼となく踊り始め我々を誘ってくる。それにWDGのメンバーである二人の女生徒が応戦する。両者とも見事な踊りだ。そこにいる人々が次々にダンスの輪に巻き込まれていくので、小生も仕方なく安来節とも阿波踊りともつかぬ風体でその輪に加わる。そして、その踊りは止めどなく続いていく。その踊る人々の姿は、あたかもダンスをしながら感じるこの幸福を心に、そして身体一杯に刻みつけようとする者のようだ。

唯一の観光はバシユバティナート訪問であった。その寺院には火葬のガートがあり、遺体はそこで荼毘にふされるのだが、焼け残った骨灰は、対岸の我々の目の前でザザーという音も立てずにバグマティ川に流される。ヒンドゥー教では死者の魂は極楽に常住すると考えるらしいから、死は家族との別れではあるが、むしろ喜ぶべきものであるかもしれない。それにしても深いまでの淡々さだ。

ネパールへの旅は小生にも大きな衝撃を与えた。参加した学院生にとってはもっと大きなものであろう。少女売買の根源には貧困の問題がある。それを一朝一夕に解決する方策などあるはずがない。我々の旅を独りよがりだと批判するむきもあろう。世界ではポピュリズムの擡頭と軌を一にして保護主義、ナショナリズムが高揚しつつある。しかし、本学院が志向するのはあくまでも「国際共生」だ。今回の旅で貧困を、死生観の違いを目的の当りにした学院生は必ずやこの視点で将来を構想してくれるにちがいない。

今回の旅ではチヨモランマの雄姿は見られなかった。だから、なお一層思うのだが、いつの日か、旅を企画した高岡、田中、旅に参加した宮野、金子、清水、市川、白井らとともにネパールを訪ね、チヨモランマの雄姿を見たいと思う。

稲稜祭で築く伝統

稲稜祭実行委員長 3年 宮野 雄弘



学院生にとって「稲稜祭」とは何でしょうか。日々の練習の成果を発表する場、日常を忘れてはいい子と写真が撮れる日、「稲稜祭」に対する思いは人それぞれだと思います。しかし、いつもはあつちやこつちを向いている学院生が、稲稜祭の期間だけは同じ方向を指しています。もちろんステージでの発表、クラス企画、好きなあの子と仲良くなるなど、それぞれのゴールは異なります。しかし、それぞれのゴールが、「稲稜祭」というもののゴールを作り上げるのです。第35回稲稜祭での私のゴールは、学院生一人一人が輝き、



日頃知ることのできない「輝き」を発見できる場を提供することでした。稲稜祭で自分を輝かせられましたか？他の人の「輝き」を発見できましたか？一人でも多くの学院生がこの問いにYesと答えてくれると嬉しいのです。

さて、第35回稲稜祭のテーマは「稲翔」です。過去の伝統をしっかりと引き継ぎ、さらに高い頂へと羽ばたく。そんな機会を提供するべく、何度かトラブルを起こしながらも稲稜祭実行委員は一丸となって、半年間準備してきました。過去の稲稜祭の良かった点、そして現学院生の意見をなるべく多く取り入れたつもりです。Wモニュメントの再作成や、ステンドグラスの復活、食堂での食品販売を全て屋台に移行するなど、目立つところはもちろん、実行委員の腕章着用、パンフレット



でのバスタイヤ掲載、タイムテーブルの見直しなど、細かいところにも多くの気を配りました。これらのことは全て、各バトリーターを始め、稲稜祭実行委員が中心に進めてきました。その為には実行委員は炎天下の中カワイズにバシられたり、まるで生徒指導の様に教務室に何度も呼び出されたり、最終下校の時間を過ぎてしまひ歩いて本庄まで帰ったり。大変なことでも沢山ありましたが、稲稜祭実行委員でなければ名前すら知らなかったような人たちと仲良くなり、協力して作業をすることができてとても楽しかったです。そんな中で稲稜祭が去年よりもよいものになったと感じてもらえたら幸いです。

最後に、稲稜祭は学院生の情熱と伝統が詰まった、早本の象徴です。特に、学院生が一体となつて縦に揺れる、後夜祭の紺碧の空は圧巻です。早本特有の縦揺れの紺碧の空も、先輩方から受け継いできた伝統です。このように、稲稜祭を通してそれぞれが早本の伝統を積み上げてほしいです。3年生は最後の稲稜祭、後輩に「何か」を残せましたか？1、2年生はその「何か」を感じ、受け取ってくれましたか？その「何か」には色々な形があると思います。ただ、その「何か」を確実に受け継いで、稲稜祭はもうろん、早本という学校をより良い学校にしていってほしいと思います。

稲稜祭を開催するにあたり、学院生はもちろん、峰先生をはじめとする先生方や、事務所の方、保護者の方々など、ご協力くださった皆さんに感謝を申し上げます。ありがとうございます。



今年の「芸術鑑賞教室」は演劇鑑賞で、幼いヘレン・ケラーの心の扉を開こうとするアン・サリバン、壮絶な格闘がテーマだった。クワイマックスでは、アンは荒れ狂うヘレンを井戸端に連れてゆき、流れる水に片手を触れさせながら、もう一方の手で「WATER」を指文字で綴る。物には名前があり、アンがそれを教えようとしていることをヘレンは一気に悟る。物や家族に一つ一つ触れながらヘレンが「名前」を求めアンが応じ続ける、爆発的な喜びに満ちたシーンだった。▼ヘレンはこの日以降、貪欲に学ぶ。触覚、嗅覚、味覚のすべてが駆使され、指文字で綴られる文学が失明前に見た記憶を活性化させる。たまたま「触覚入門」(朝日出版社)という興味深い本を読んだとあったので、ヘレンの「五感」に着目しながら自伝を読み返してみた。▼触覚と嗅覚が鋭敏なのは予想通りだが、「音」に関する描写が多いことに気がついた。海で彼女が感じることは想像できる。水しぶきを浴びながら、砕ける波のどころきや転がる小石がたてる音を全身で感じている。興味深いのは都会の描写だ。彼女は「私のからだ全体が周りの状況を知覚している」と言い、「都会の騒音は、私の顔の神経を打ちのめす」と語る。▼「触覚入門」では視聴覚に隠れがちな触覚の巧妙な動きや、「五感」の境界のあいまいさ、触覚と感情の強い関係が紹介されている。ヘレンは成人後に高名な俳優に紹介され、顔に触らせてもらって「神々しさ」に秘めた悲哀を感じたと書くが、これは「目あき」には持ちえない感覚かもしれない。▼ヘレンの優れた感覚を最初に育んだのは自宅の周りの自然だった。草木の香り、鳥のヒナの感触、雷雨を予感させる匂い。筆者の生活は視覚と言葉に頼りがちだが、触覚や匂いに気持ちを向ける時間がもっとあってもいいと思われた。

修学旅行を 振り返って

3年生は10月に台湾・韓国・中国の3コースに分かれて修学旅行へ行きました。

台湾修学旅行

3年E組 塩谷 隆太

謝辞大家。

私は高校3年間で一度も行事の実行委員になつたことがなく、いつも用意された行事に参加させてもらうぐらいにしか感じていなかった。そこでせっかくだし、最後に修学旅行の実行委員でもやってみるかと思い、実行委員になり、行事を用意する側の立場になった。

台湾コースに参加を決めた理由は、ただ台湾が唯一選択肢の中で行つたことのない国だったからである。また、台湾で使われている言語は英語と中国語のため、インター通いの中国語帰国である私にとって、みんなが修学旅行を楽しめるようサポートするには最適な場所と考えたからである。台湾では去年の先輩たちの修学旅行と同じく、台風の被害に見舞われた。台風による直接的な被害者はいなかったが、3日目と4日目のスケジュールを変更せざるを得なくなるなど、いろいろな大変であった。高速鉄道が運転を中止し、乗れなくなるなどのトラブルが起つたにも関わらず、先生たちは迅速に落ち着いて対応してくださり、スムーズに楽しい時間を過ごせたこと、非常に感謝している。

ここでは、台湾で楽しかったこと、美味しかったもの、印象に残った出来事を述べていく。
私が楽しかった、すごいと感じたスポットBEST3は台北101展望台、故宮博物院、九份である。台北101では高さ692mの展望台に分速1010m(世界2位の早さ)を誇るエレベーターでいっきに昇った。それだけでも感動したが、なんといっても地上69mからみえる夜の台湾は感無量であった。是非来年の3年生にも見てもらいたい。次に故宮博物院である、ここでは中国歴代王朝の皇帝たちが集めた宝を基に69万点以上もの中国の美術品などを展示している。有名な翠玉白菜は別の博物館で展示

韓国修学旅行での思い出

3年F組 水越 百香

されていたため、目にするのが出来なかつたが、宋の時代の陶器など長い歴史をもつ美術品が展示されており、歴史を感じる事が出来て感慨深かつた。そして九份、ここは日本でも台湾に旅行したら行つておくべきスポットとして有名である。なぜここが有名なのかと言うと、ここは千と千尋の神隠しで出てきた湯屋や、映画で出てきそうな屋台が多く立ち並ぶからである。一度九份に入るとタイムスリップしたような感覚に陥り、別世界に生きているようで、心も体も浄化された気分になった。

台湾で何が美味しかった?と聞かれたら、真っ先に思い浮かぶのは小籠包である。あれは絶品、絶品という言葉以外表現しようがないくらいとにかく美味。特におすめなのが世界的有名店鼎泰豊の小籠包である。また、台湾で食べたフルーツはどれもおいしかった、パッションフルーツとマンゴーが特におすすりである。

私にとつての台湾での一番の思い出は、現地(台中一中)の生徒と一緒にバスケットボールをしたことである。初めはお互い名前もわからず、仲良くなるか心配であったが、気づいたらものすごく仲良くなつていて、別れるときには別れを惜しんだ。国籍が違つても一緒に楽しむことができる「スポーツ」とは本当にいいものだ、と感じた。

最後に、この修学旅行は自分にとつてかなり大きな思い出となった。夏休みの実行委員の集まりから始まり、苦しくて大変なこともあったが、先生方、日本旅行の方々、台湾コースのみんなに支えられて、素晴らしい修学旅行という思い出を作ることが出来て、感謝の気持ちでいっぱいである。謝辞大家。



中国に行つチャイナ

3年D組 西川 歩美



鮮を目の前にし、実感がわき、北朝鮮と韓国や日本とのこれからの関係性について考えさせられました。トラサン駅から北朝鮮に続いていく今は使われていない線路に、いつかまた開通する時への希望をひしひしと感じました。

そして何よりみんなが一番印象に残っているのは自由行動ではないでしょうか。異国の地で自分たちで自力で調べて目的地まで辿り着くのは大変なこともありましたが、その分達成感と充実感がありました。店員さんも驚くほどに日本語の話せる人が多く、困った時は助けられました。私たちのグループの行き先は弘大と明洞でした。弘大と明洞では韓国グルメを食べつつ、ショッピングをし、時間はもつとあつたらしいのと願うほどあつたという間に過ぎました。

この旅を楽しく無事に終わったことに先生方、そしてJTBの方々に感謝を申し上げたいです。特に高校生との交流が直前になくなつてしまつたのにも関わらず、違う形ではありますが交流を意図してくださつたことにはとても感謝しています。そして何よりもこれが気心の知れた仲間との旅でなかつたとしたら実際の半分も楽しくなかつたと思います。くだらないことで笑いあい、いつもは話さないことも話した夜こそが写真には残っていないけれど心に残っている思い出なのではないでしょうか。高校生活の最後に記憶に残る思い出を作れたことを私はとても嬉しく思います。



修学旅行の3つあるコースから北京が一番日本からかけ離れていただろう。北京コースは毎年他のコースの人数より半分以上少ない。それぞれば北京コースを選ばない理由はあると思う、大気汚染、一番危険そうなどなど。だが案ずるより産むが易し、私たち一行を乗せた飛行機は北京の空港に着いた。一時間以上並んだイミグレ、税関は抜かされぬよう私たちは勇敢に立ち向かつた。私たちは疲れ切つていた。ホテルに着いて私は水が欲しくなつてフロントに電話した。英語が通じなかつた。本当に5つ星なの。私たちの口から不満が漏れた。次の日はいきなり万里の長城だ。某日本史のM先生は万里の長城を登るときは登つて降りてくる時間を記録するそうデバストタイムは15分らしい。来年北京コースに行く人はこのタイムを超えてみよう。ともかく私のような怠け者には大変だった。9割ほど登つたもののタイムリミットがあつたためもう降らなくてはならなかつた。降りるときには生まれたての子鹿みたいに足がプルプルした。それよりも私が万里の長城でびつくりしたのはもちろん観光地なため多くの外国人観光客がいて皆がフレンドリーだった。お互い励ましあつたり人間も捨てたもんじゃやないなと思つた。そのあと行つたお茶文化体験は大人の事情で行くおきまりのところらしい。何も買わなかつた。3日目は紫禁城と雑技団がハイライトだった。まず紫禁城。紫禁城に入る前天安門広場のトイレに入つたがすごい面白かつた。なんとトイレ一つに鍵がないのだ。だから後ろに並んでいる人がトイレの扉を押さえておくのだ。皆結構これを不快に思つたらしいが発展途上国帰国で汚いトイレは何回も入つたことのある私には面白くてしよががなかつた。飛行機で5時間飛んだだけでこんなにもトイレは大きく変わつてしまふのか、と思つた。前日に景山公園から全体が見渡せたが大きすぎた。国土が広いとなんでも大きくできるから羨ましいと思つた。だが飽きつぱい私は紫禁城の3つ目の部屋くらいで飽きた。大きすぎるのもよくない。雑技団は圧巻だった。私たちと同じくらいの人もしくは私たちよりも年下の人たちが人間離れした技を繰り出していた。写真撮影がいけないなど結構厳しいのかと思ひ、終わったあと雑技団の方々が片付けを始めたから帰り際恐るる手を振つてみたらすごいフレンドリーに手を振り返してくれた。雑技団の方々とセルフイー



4日目は交流だ。私のパディーはアメリカの大学に行きたいのもあり英語がすごく堪能だった。日本のアニメ、漫画がすごく好きらしくて日本語も多少は話せていた。自分の興味のあることは言語まで習得させてしまふのか、と思つた。そのあと一緒に夕食を食べたわけだが他のパディーの子とも話せた。来年行く方々はできるだけ自分で言葉を伝えるようにしよう。帰国子女に訳させるのはやめましよう。頑張りて伝えようと思つれば向こうもよく勉強ができるので頑張りて汲み取ってくれる。だが、それにしては我々日本の学生と中国の学生の英語の差が凄まじかつた。中国ではどういう英語教育を行なっているのだろう。日本も見習うべきだと思つた。

待ちにまつた最終日は自由行動だ。北京大学で日本語を勉強している私たちの班には「ごっちゃん」が一緒に行動してくれた。私たちは繁華街に行つた。私たちはえげつない中国のパクリものを探したが見つからなかつた。理由を聞いてみたら上海にデイズニールランドができてから規制が厳しくなつたらしい。おそろるべしウォルトディズニール。



スーパーグローバルハイスクール (SGH) の取り組み

2015年4月より、本学協賛文部科学省スーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定されました。「国際共生パートナーシップ育成プログラム」をテーマに、様々なプロジェクトに取り組んでいます。2年目となる本年度は、授業内での実践や生徒の海外派遣事業など、新たな試みも数多く展開されています。

【Pre-WaiSECの開催】

12月19日～22日にかけて、本学院を会場に国際高校生会「Pre-WaiSEC」を開催します。WaiSECとはWaseda International Symposium on Education and Cultureの略で、2018年に開催を予定しています。本年度はそのPre大会を行うものです。国内外7校からゲストを招待し、すべて英語による研究発表（オーラルプレゼンテーションとディスカッション・ポスターセッション）、コラボレーションプログラムなどを実施します。現在、約50名の生徒による実行委員会が準備を進めています。なお、2日目のプログラムは本年度のSGH報告会を兼ねています。

【「政治・経済」(SGH)・コミュニケーション英語Ⅱの連携と実践】

2年生必修科目「政治・経済」のうち1単位をSGH科目として設定し、課題発見・探求型の授業を行っています。グローバル社会における諸問題の中から具体的な問いを設定し、グループワークによって解決策を考えます。2回の中間報告プレゼンテーションを経て、成果を英語のポスターにまとめ、12月のPre-WaiSECにて公開します。英語での成果発表はコミュニケーション英語Ⅱの授業で支援しています。

【国内外派遣(フィールドワーク)プロジェクト】

夏季休業期間に、8つのプロジェクトで50名以上の生徒を国内外に派遣し、フィールドワークを行いました。いずれのプロジェクトも、少人数のチームで主体的に事前学習と活動計画の立案を行い、取材や交流によって多様な価値観をもつ人々とのパートナーシップ構築力を育成することが特徴となっています。これらの成果はすべてPre-WaiSECにて英語で発表されます。

①韓国・ハナ高校国際シンポジウム参加 (7月)

韓国有名な名門私立校であるハナ高校の国際シンポジウムに参加しました。アジア各地から集まった優秀な高校生たちによるハイレベルな議論や文化交流など、本学院のPre-WaiSECを企画・運営するうえで大いに参考になるものでした。

②フィリピン・環境ボランティア (7月)

国際環境NGOと連携し、ネグロス島において現地高校生との交流と研修、マングローブ植樹ボランティアを行いました。環境問題に取り組むだけでなく、山間部の村でのホームビジットや歴史文化探訪なども行い、異文化理解を深めることができました。

③上海フィールドワーク (7月)

新緑業を軸とする教科横断型授業の調査のため、上海を訪問しました。かつて日本人が多く暮らした場所を巡り、租界時代の面影を残す煉瓦建築などを調査しました。在華紬を通じて日中両国の歴史・関係を学ぶ、蘇州高級中学との共同研究実践に向けて準備しています。

④シンガポール・インバウンドツーリズム調査 (8月)

観光立国であり多文化多民族国家であるシンガポールで、インバウンドツーリズムをテーマにフィールドワークをしました。日本政府観光局でのインタビューや観光地視察、SSHで長年交流のあるNational Junior College訪問とディスカッションなどを行いました。

⑤ネパール・社会問題研究 (8月)

人身売買被害・貧困問題をテーマに、ネパールでのフィールドワークを行いました。国境地帯の検問所見学やホスピス訪問、プリベンションキャンプでの交流を通じて、少女たちの教育問題や自立支援について学んだだけでなく、生活観の違いなどを肌で感じました。

⑥韓国・安養外国語高校とのテーマ型学習交流 (8月)

昨年度から継続中の安養外国語高校との学習交流の一環として、両校合同による韓国フィールドワークとフォーラムを実施しました。4日間のホームステイ、浅川巧ゆかりの地への訪問、日韓関係を考えるグループワークと発表会などを行うことができました。

⑦インドネシア・発信型プロジェクト交流 (8月)

World Youth Meetingで交流が続くインドネシアSMA N2 Yogyakartaを訪問し、コラボレーションにより毎年制作しているFree Paperプロジェクトのミーティングや授業参加を行いました。インドネシアの歴史に触れ、様々な文化を体験することができました。

⑧沖縄・基地問題研究 (9月)

昨年度に続き、沖縄の基地問題をめぐるフィールドワークを実施しました。今年新たにSGH指定校となった県立那覇国際高校との学習交流や沖縄国際大学訪問、テレビディレクターへの取材、辺野古基地建設予定地調査などを通じ、思考を深めました。

この他、ボランティアチーム「思い愛隣」による熊本地震支援募金活動や駐日ブラジル大使との懇談・交流など、様々な活動が行われています。より詳しい情報は学院生のPRチームにより本庄学院WEBページなどで広報しています。

Super Science High School事業報告 (2016年6月～12月)

■ 藤田小との連携活動

早稲田大学本庄高等学院河川調査班は2012年度から本庄市立藤田小学校と一緒に本庄市内河川の環境調査を行うとともに、5・6年生の総合学習の年間講師を務めています。2016年度の河川調査班は、1B熊谷琴葉、1D中村華英、2A小泉悠登、2B鈴木未来乃、2E清水理愛、2F香掛理美、3A荻野結衣、3C畑蘭乃、3D垣鈞結衣、3H高崎航平・久保田怜奈・玉手萌衣の12名です。

* 5月25日第1回講義を行いました。この日のテーマは「お花のふしぎ～ランの花はどうして不思議な形なんだろう？～」です。ランの花を解剖し、花の形が虫にとって都合のいいように作られていることを学びました。

* 6月1日第2回講義を行いました。この日は翌週の河川調査に備え、胴長を来た時の動き方・網の使い方、河川で見つかる生物を学びました。

* 6月8日小山川と元小山川で第1回合同河川調査を行いました。

* 6月15日第3回講義を行いました。この日は前週の調査で分かったことの発表でした。

* 9月14日第4回講義を行いました。この日のテーマは「コハクの不思議～1000年前の虫を観察しよう～」です。児童一人一人にコハク(正確にはコーバル)と紙やすりを配布し、磨いで中の虫をルーペで観察しました。コハクはお土産に持ち帰りました。

* 10月26日小山川と元小山川で第2回合同河川調査を行いました。この日はシンガポールのNJCの諸君も参加しました。

* 11月6日ふじこ祭の講師を務めました。河川研究班はチリメンジャコからいろいろな生物を探すことにより海の世界を創造する「チリメンモンスターを探そう!」を行いました。この日は、初めて本校の応援部チアPARTがチアダンスの講義を行いました。児童には大変好評でした。

* 11月9日第5回講義を行いました。この日は前週の調査で分かったことの発表でした。

この後、12月に1回、2月に2回の講義が予定されています。また、3月の市民シンポジウムでは本庄市内河川の様子を藤田小・本庄学院側から発表する予定です。この日は3年生最後の授業でした。



■ Singapore National Junior College (NJC) との交流活動

2007年より交流活動が続いているNJCとは今年度が10周年でした。

* Waseda-NJC Exchange Program

7月29日～8月7日の日程でNJCに9名の生徒が訪問しました。参加者は1B碓松そよぎ、2A石原みらい、清水綾乃、2B花田知優、2E清水理愛、2F稲葉智沙貴、2H野村涼口、3C飛地和志帆、鈴木曜夏です。3班に分かれて共同研究を行いました。2年参加生徒の数名は、卒業論文でもそのテーマを扱うことになりました。



* NJC-Waseda Exchange Program

10月24日～31日の日程で、9名のNJC生徒と2名の教員が本庄学院を訪れました。今年度のこの研修は、JSTのさくらサイエンスプランに採択されました。さくらサイエンスプラン採択のためには交流テーマを決める必要があります。今回のテーマは「シンガポールと日本の水事情から世界の水問題を探る」です。都内研修(科学未来館、早稲田大学神原研究室、東京大学松田研究室)のほか、ヤマキ醸造・サンデンフォレスト・群馬自然史博物館・河川調査・長瀬見学、茶道道による歓迎お茶会等多多彩なプログラム



を実施することができました。開会式では10年ぶりに姉妹校協定の再調印することができました。この場を借りて、ホストファミリーをしてくださったご家庭に心から感謝申し上げます。

■ Thailand Mahidol Wittayanusorn School (MWITS) との交流活動

MWITSとは2004年以来不定期な交流活動を行ってきましたが、昨年より姉妹校協定締結の動きが始まりました。1月に10名の学院生がMWITSを訪問しています。今回は10名の生徒2名の教員が本庄学院を訪問しました。都内研修(早稲田大学神原研究室、国立科学博物館、科学未来館)、さいたま水族館、河川調査、火山博物館と鬼押し出し、ヤマキ醸造、文化交流、長瀬見学等多多彩なプログラムを実施することができました。この場を借りて、ホストファミリーをしてくださったご家庭に心から感謝申し上げます。



■ 河川調査班の活動

河川調査班は、毎年4月に募集し、藤田小との連携活動を中心とした本庄市内河川環境改善活動を行っています。それとは別に、卒業論文を軸とした「マシジミとタイワンシジミの分布」「外来エビの侵入状況の調査」「地下水のNOx汚染状況の調査」「日本の小河川環境に適した超小型水力発電機の開発」の4つのプロジェクトが現在進んでいます。特にエビの研究については、韓国と岡山で研究発表する機会がありました。

* 日韓青少年水フォーラム

7月26日～29日の日程で表記フォーラムが韓国水原市で開催され、韓国と日本の中高生が研究発表および水環境をテーマとしたさまざまな交流を行いました。本庄学院からは3A荻野結衣、3D垣鈞結衣、3H久保田怜奈・玉手萌衣が参加し、「外来エビと在来エビの環境適応力の違いの分析」というテーマで研究発表しました。

* 第9回いり川・いり川づくりワークショップ

9月9日～11日の日程で表記ワークショップが岡山県高梁市で開催されました。本庄学院からは3H玉手萌衣と久保田怜奈が参加しました。このワークショップは大人・大学生を含め日本全国で水環境保護活動をしている人々が参加し、その活動の評価を行うものです。研究の深さよりも河川環境改善活動に重点をおいて評価されます。高校は本校を含め2校だけでした。通常の研究発表とはやり方が異なり、全体の前で3分の自分の活動の「売り込み」をした後、分科会場でポスターを元に改めて活動内容を紹介し、4名の審査員と会場から厳しい質問を受ける形式でした。この1次選考を通過した活動が2次選考のプレゼンテーションに臨むことができます。本校からは外来エビの侵入状況の調査と生物多様性保護の必要性を訴えました。

グランプリ本・準グランプリ2本には選ばれませんが「川と真剣に向き合う勇氣とやさしさにあふれた活動」に対して贈られる、河川環境保護活動に尽力した森清和先生の名を冠した森清和賞を受賞することができました。



■ 小笠原研修

毎年実施していた小笠原研修は、台風の影響により中止となりました。現在、3月に再実施するかの検討を行っています。

■ Japan Super Science Fair (JSSF) 2016

JSSFは立命館高校が主催する世界で最大規模の国際高校生科学学会です。21か国300名近い高校生・教員が参加します。本校からは2F百瀬匠真、2H市川実花・野村涼口・久保田怜奈が参加しました。百瀬・市川は河川エビの外来種による汚染とその分析("Analysis of the difference of vital forth between

endemic shrimp and alien")、野村はNJC生徒との共同研究として船が航行するときに起こるケルビン波とその分析("Investigation of Kelvin Wake")を発表しました。研究発表、ポスターセッションの他、Science Zone(課題コンペ)、講義、企業訪問、遠足など多彩なプログラムでした。また、多くの国の生徒と交流を深めることができました。



■ 特別講義「これがサイエンスだ!」

* 「地震発生の仕組みと法則性」新井宏嘉(地学科)
* 「平面代数曲線の特異点とその解消」太田洋平(数学科)
* 「反物質とは? ～実験で探る素粒子～」大塚未来(物理科)
* 「理科が苦手な人にこそ知ってほしい ～物理屋さんの頭の中～」というユニークなテーマで、東北大学の田中香津生先生にお話しいただきました。

■ SSH特別講義

* ホンダ次世代水素エネルギープロジェクト 講演会 (ホンダ、リバネス、埼玉県庁共催)
タイトル「水素エネルギーを使ってみよう!」



11月9日に、ホンダの蓄電池の専門家から、水素の作り方から始まり、発電技術、蓄電技術を実験しながら説明していただきました。また、埼玉県県庁から日本に60台しかない水素自動車も持ってきていただき試乗会を行うこともできました。参加者からは、多くの質問が寄せられ、丁寧に答えいただきました大変有意義な講演会でした。

* 植物無菌播種講習会

10月26日にSSHクラブの一環として、サボテンの種の無菌播種実験を行いました。当日は株式会社チャームのかたからクリーンベンチの作り方や、アルコール消毒の仕方、培地の作り方など基礎からしっかりと教えていただきました。参加した生徒全員がサボテンの種子を播いた小瓶を持ち帰り栽培することになりました。



■ SSH生徒研究発表会

SSH校全部が参加して研究発表を行う研究発表会が8月9日～11日の日程で神戸国際展示場で行われました。本校からは3名の生徒(鎌田賢知、川澄優介、原田慧)が参加し、「紙の橋の構造の研究」のタイトルでポスター発表を行いました。工作用紙とホチキスだけで、どれだけの重りを載せられるかを追求し、長さ25cm、幅10cm、高さ3cmくらいの大きさの橋で15kgのおもりを載せることができ、会場では多くの教員が興味を持ち、授業で使っていたいの声も聞かれました。



9年振りの母校

地理歴史公民科(地理) 高井 寿文

教員コラム

木もれ日

「この論文の地理学における位置付けを教え下さい」「この研究のオリジナリティーはどの部分でしょうか?」「いま卒業論文の提出を間近に控えている3年生の皆さんも、指導教員との議論の中でこのような質問を受けることがあるかと思いますが。昨年度1年間は、私もこのような「学生生活を送りました。」

私は、特別研究期間制度を利用し、母校である名古屋大学大学院環境学研究科社会環境学専攻地理学講座に、大学院研究生として9年振りに所属しました。博士前期課程と後期課程の若い大学院生に囲まれてアカデミックな環境に身を置きながら、自らの研究活動に専念できました。現職でも時間の許す限り地理学関係の学会に参加して、最新の話題を吸収するようにしていますが、1日中研究の事だけを考えている環境から9年間も離れています。自分より15・20歳も年下の大学院生と、果たしてうまくコミュニケーションが取れるのか、地理学の最新の話題についていけるのか、甚だ心配でした。幸いにも現役の後輩たちは温かく迎えてくれました。久しぶりに学問や研究の話

題で、若い大学院生たちと酒を飲みながらトコトン議論しました。また高井が名大地理に所属するのを聞きつけて、私が大学院生の時の後輩たち数名が会いに来てくれました。懐かしい昔話で盛り上がり、旧交を温める良い機会となりました。

名古屋大学地理学講座では毎週金曜日14時45分から18時までの時間帯に大学院ゼミが設置されており、毎回2人ずつ研究の進捗状況について報告します。1人90分間の持ち時間の中で、報告の後に質疑応答を受け、研究の位置付けや意義を議論します。多くの後に質疑応答を受けてゼミが行われますが、ここでは研究室や人文地理学・自然地理学の枠を超えて、講座に所属する全ての教員と大学院生とが一堂に会して議論するという、全国でも珍しい体制をとっています。発表者は辛辣な意見を次々と受けるので、私が大学院生の時は、自分の発表日が近づくと気が重く、本当に胃が痛くなったものでした。現在では自分の研究に対して事前にアドバースを受ける機会が無く、たまに不安になることがあります。9年振りの大学院ゼミでの発表は、自らの研究内容を確認でき、意見をもらえるという意味で、現役当時とは異なる新鮮な感覚を抱きました。

私は、これまで人文地理学における空間認知研究の立場から、日系ブラジル人によるハザードマップの読図実験や、近年ではパングラデシユ農村地域における手描き地図の調査を行ってきました。しかし、いずれもデータが未着手の状態でした。そこで、この1年間でそれぞれデータの分析を進め、学芸発表や雑誌論文への執筆作業を行いました。前者の読図実験は、発表題目「日系ブラジル人によるハザードマップの読図過程」と地図表現との関わりを2015年9月に愛媛大学で行われた日本地理学会秋季学術大会で発表しました(写真)。また、新しい研究テーマにも着手し、発表題目「地方自治体における外国籍住民向けハザードマップの作成状況を、2015年3月に早稲田大学で行われた日本地理学会春季学術大会にて発表しました。一方、後者の執筆作業については、論文題目「手描き地図からみたパングラデシユ農村地域の人々の空間認知」が、2016年3月に駒澤大学応用地域研究所「地域学研究会」第29号35・44ページに掲載されました。このように自らの研究を僅かながらでも前進でき、大変に有意義な1年間でした。



生徒達の活躍

◆陸上部

県新人陸上競技大会 北部地区予選会
9月18～19日(熊谷文化スポーツ公園)

男子
100m 4位 河原啓志(2D) 8位 柳澤 亮(1A)
400m 2位 大畑遼恭(1C) 4位 関 宏太(1F)
5位 難波拓斗(1B)
800m 2位 大畑遼恭(1C) 6位 関 宏太(1F)
1500m 7位 狩野佑介(1F)
5000m 8位 狩野佑介(1F)
400H 優勝 松久保大智(2D)
3000障害 3位 的場寛人(2F)
4X100mR 3位 早大本庄 守谷光永(1B)
柳澤 亮(1A)難波拓斗(1B)河原啓志(2D)
4X400mR 優勝 早大本庄 山崎 光(2H)
河原啓志(2D)関 宏太(1F)大畑遼恭(1C)
走り高跳び 2位 伊藤 陸(2A)
槍投げ 5位 高橋淳也(2A)
女子
400m 8位 木下真織(1B)
100H 6位 足立涼子(1H)
7位 落合 優(1H)
4X100mR 4位 早大本庄 木下真織(1B)上野真琴
(1A)足立涼子(1H)加藤友子(1H)
4X400mR 4位 早大本庄 木下真織(1B)足立涼子
(1H)加藤友子(1H)高原歩希(2H)
走り幅跳び 優勝 上野 真琴(1A)
三段跳び 7位 足立涼子(1H)
8位 落合 優(1H)

埼玉県新人陸上競技大会 9月30日～10月2日
(熊谷文化スポーツ公園)

男子 400m 8位 大畑遼恭(1C)
4X400mR 6位 早大本庄 河原啓志(2D)
難波拓斗(1B)山崎 光(2H)大畑遼恭(1C)
女子 走り幅跳び 4位 上野 真琴(1A)

★上野さんは 10月22日に熊谷文化スポーツ公園でおこなわれた関東選抜陸上競技大会に出場し、5m65cmの記録で2位に入賞しました。
★埼玉県高校駅伝 11月1日(熊谷文化スポーツ公園)
男子 19位
狩野佑介(2F)朝倉義秀(3E)石川裕貴(3F)
的場寛人(2F)守安剛崇(3A)
駒井陽人(2G)橋爪貴広(3B)
女子 16位
玉手萌衣(3H)宮島瑞生(3G)高原歩希(2H)
星 優奈(1D)齋藤夏生(3D)

◆硬式テニス部

インターハイ予選、5月28日～29日

男子
シングルス:2位 木元風哉、ダブルス:2位 木元・岩満大輔(どちらもインターハイ出場)

インターハイ予選団体戦、6月4日～5日

男子 1回戦1～2浦和学院(D照井・岩満4-8古賀・秀、S1木元8-5塩谷、S2相原4-8福島)
女子 1回戦0～3山村学園(D室伏・齊藤1-8黒須・塩谷、S1舟橋0-8清水、S2伊藤1-8矢崎)

インターハイ、8月5日～6日於島根県

男子シングルス 1回戦:木元9-7大塚(静岡市立)、
2回戦:6-8市川(西宮甲英(兵庫))
男子ダブルス 1回戦:木元・岩満7-9井内・溝淵(城南(徳島))



男子
シングルス
5位 津田陸希、7位 小川航平、16位 川上陸、21位 井上雄太
ダブルス
2位 津田・小川
女子
シングルス
1位 室伏奏旅、2位 森川優希、3位 齊藤ひろ、
14位 田村鞠乃、17位 川口優衣、19位 高橋架
ダブルス
1位 森川・室伏、4位 齊藤・川口、10位 田村・高橋

新人戦、10月1日～3日
男子シングルス ベスト64 小川
女子シングルス ベスト32 室伏・森川・齊藤、
ダブルス ベスト16 森川・室伏

新人戦団体戦、10月29日～31日
男子(11シード)

新人戦団体戦、10月29日～31日
男子(11シード)
1回戦4-1本庄、2回戦3-0草加南、3回戦0-3伊奈学園
女子(8シード)
1回戦5-0成徳深谷、2回戦3-0県立川口、3回戦0-3伊奈学園

1年生大会(Dunlop Cup)、11月3日、14日、23日
男子:予選リーグ2-1(1位)、決勝リーグ1回戦1-2岩槻女子:予選リーグ(第1シード、スーパースードで免除)、決勝リーグ2回戦2-1本庄、3回戦2-0越谷、4回戦2-1市立川口、準決勝2-1伊奈学園(D1室伏・齊藤6-2、D2森川・村瀬6-1、D3三村・新井0-6)、決勝2-1昌平・春日部女子(D1新井・大橋0-6、D2室伏・齊藤6-0、D3森川・村瀬6-0)



◆ソフトテニス部(男子)

県北新人選手権大会(8月18日)
ベスト8 宮下皓志(1B)・小池华弥(2B)ペア
ベスト3 2 田中尚史(2D)・兼田崇裕(2H)ペア
新人大会北部地区予選会(9月18・20・23日)
個人戦 優勝 宮下・小池ペア
ベスト16 田中・兼田ペア
団体戦 3位
新人戦県大会(11月14・15日)
個人戦 ベスト64 宮下・小池ペア、田中・兼田ペア。
団体戦 ベスト16
※宮下・小池ペアの北部地区個人戦優勝は、学院生男子では4年ぶりとなります。
また、新人戦県大会団体戦ベスト16入りしたことにより、6年ぶりに県インドア大会の出場権を得ることができました。

◆ソフトテニス部(女子)

辰巳穂乃実(2H)・飯塚優夏(1F)ペア
県北新人選手権大会(8月20日) 優 勝
新人大会北部地区予選会(9月19日) 準優勝
新人戦県大会(11月12日) ベスト16
※辰巳・飯塚ペアは、県総合選手権大会などへの出場権を得ました。

◆硬式野球部

平成28年度秋季大会 県大会出場
北部地区予選
・1回戦 9/9(熊谷公園球場) 対熊谷工業高校 6-4
・代表決定戦 9/12(上尾市民球場) 対深谷第一高校 13-0(5C)

県大会
・2回戦 9/25(市営大宮球場) 対春日部東高校 3-11(7C)

第31回県北8校野球リーグ 秋季トーナメント 優勝
・1回戦 11/5(本庄市民球場) 对本庄第一高校 10-3
・2回戦 11/12(本庄市民球場) 对本庄東高校 9-8
・決勝戦 11/14(本庄市民球場) 对本庄高校 15-2



◆ラグビー部

国体県大会北部地区予選
準決勝 5月3日(火・祝) 早大本庄 41-5 松山
決勝 5月7日(土) 早大本庄 35-14 熊谷

国体県大会
準々決勝 6月1日(水) 早大本庄 45-31 不動岡
準決勝 6月7日(火) 昌平 31-7 早大本庄
3・4位決定戦 6月12日(日)早大本庄 12-5 川口北

第2回全国高等学校7人制ラグビーフットボール大会
埼玉県予選
予選リーグ(Kブロック) 6月18日(土)

	早大本庄	春日部	朝霞西
早大本庄		○28-22	○61-0
春日部	●22-28		○29-17
朝霞西	●0-61	●17-29	

1位:早大本庄 2位:春日部 3位:朝霞西
決勝トーナメント 6月18日(土)
1回戦 浦和 12-7 早大本庄

第96回全国高等学校ラグビーフットボール大会埼玉県予選
2回戦 9月24日(土) 早大本庄 80-0 進修館
3回戦 10月10日(月・祝) 浦和 17-5 早大本庄

入学した時から徹底的に「飯トレ」を行った初めての代であった田所組、最後の花園予選では強豪浦和相手に前半0-0で折り返し、後半に早大本庄がトライを先制、勝利が目の前に見えたのですが、その後ペナルティーが重なったりして徐々にボール支配率を落とし、最後の最後に2トライ返されて涙を飲みました。1年前から目標にしてきた打倒浦和は果たせませんでしたが、怪我でサポートにまわった選手、マネージャーさんも含めて、ノースサイドの笛が鳴るまで死力を尽くして戦った部員達を讃えたいと思います。3年生諸君はこの経験を今後の人生の糧として下さい。12月下旬からは飯田惣太君(2G)率いる新チームの新人戦が始まります。あらためて応援よろしくをお願いします。最近メディアに登場する機会が多くなっているラグビーですが、それを見て「ラグビーやってみたいなあ」と感じた人は1年生、2年生問わず是非グランドへ見学に来て下さい!!

◆バスケットボール部(女子)

埼玉県新人大会 北部支部予選 4位、県大会進出、村上由衣ベスト5選出

◆ワンダーフォーゲル部

定例山行と夏山・秋山合宿を中心に、部員16名で活動しています。定例山行と秋山合宿は、関東山地での日帰りおよび1泊2日とし、夏山合宿は北アルプスに縦走登山に出かけます。日帰りでも入山から下山まで5～6時間は歩く健脚コースを設定しています。先月の秋山合宿では、雲取山の山頂で御来光は拝めませんでしたが、富士山や南アルプスの山並みを遠望し、晩秋の紅葉の中を歩きました。今年度を実施した山行は、次の通りです。
4/24 新歓山行 武甲山
5/29 定例1回 日の出山・御岳山
8/4～6 夏山合宿 白馬岳
(猿倉から大雪渓を経て樽池まで)
10/30 定例2回 堂平山・大霧山
11/13～14 秋山合宿 雲取山
(三峰神社から鴨沢まで)



◇囲碁将棋部

(将棋)
2H6 江口 幸寛
第23回埼玉県高等学校将棋王位戦大会A級準優勝
第26回関東地区高等学校文化連盟将棋大会(宇都宮市)に出場予定
1A2 阿南 美穂
第23回埼玉県高等学校将棋王位戦大会女子の部4位
第26回関東地区高等学校文化連盟将棋大会(宇都宮市)に出場予定
第35回埼玉県高等学校将棋王位戦大会女子の部準優勝
第35回全国高等学校文化連盟将棋新人大会(東京都)に出場予定
1A13 尾崎 優介
第35回埼玉県高等学校将棋王位戦大会A級準優勝
第35回全国高等学校文化連盟将棋新人大会(東京都)に出場予定
1A15 笠原 大知
第23回埼玉県高等学校将棋王位戦大会A級5位
第35回埼玉県高等学校将棋王位戦大会A級4位

(囲碁)
2H36 宮内 康太郎
第40回関東地区高等学校囲碁選手権埼玉県大会個人戦(九路)準優勝
第32回関東地区高等学校囲碁選手権大会に出場予定

◇茶道部

茶道部では、お稽古やお道具作り・お菓子作りを通じて茶道への理解を深めることと自分たちの技術を磨く努力をすることはもちろんですが、同時に茶道の魅力を様々な方へ知ってもらうべく、活動をしています。



*2回、海外からのお客様への歓迎お茶会を開催しました。
9月28日タイのMahidol Wittayanusorn Schoolのお客様12名の歓迎お茶会

10月26日シンガポールのNational Junior Collegeのお客様11名の歓迎お茶会
* 7月17日有勝寺で子供お茶会を実施しました。
* 梅林堂さんのご協力の下、9月3日と菓子作り教室を開催しました。
* 5月25日は教育実習生に向けて、7月9日、11月5日、10月22日23日(稲後祭)呈茶坐来席を開催しました。呈茶とはお茶会ほど格式張らない気軽に参加できるお茶席です。皆さんも中央階段で看板を見つけたらお気軽にご参加ください。

◇ジャーナル「表面科学」掲載

論文タイトルは「光学・電子顕微鏡による桑の葉プラントオパールおよびその不均一分布の観察(坂本玲・筒井音羽・菊池環・吉田鈴奈・尾林舞香・山川冨子・半田亨共同執筆)」で、昨年11月にジャーナルFloraに掲載された"Light and SEM observation of opal phytoliths in the mulberry leaf (O.Tsutsui, R.Sakamoto, M.Obayashi, S.Yamakawa, T.Handa, D.Nishio-Hamane, I.Matsuda)"を発展させたものです。2015年～2016年に集めた桑の葉のプラントオパールの分布と成長の様子を、3年G組菊池環・吉田鈴奈が整理し分析した内容を加えました。プラントオパールの成長過程を4つのフェーズに分け、それぞれの分布を顕微鏡写真を見ながら、限られたエリアにそれぞれ何個あるかを地道に数え上げました。顕微鏡写真は膨大な数になります。

査読意見をもとに何回か書き直し、ジャーナル「表面科学」第37巻第10号2016年10月版に掲載されました。論文が認められるにはこのような苦労があるのだ、ということを経験できたことは、生徒にとって貴重な収穫となったことと思います。



◇14th Intelligent Ironman Creativity Contest 2016(7月23日～31日)第3位

このコンテストは2003年度に、台湾高校生の創造力養成を目的に台湾教育部主催で開始されました。2005年度に国際大会になり、本庄学院はその年から毎年日本で唯一校招待参加しています。今年度は、初めて離島で開催されました。会場は金門島の国立金門大学です。
本庄学院は、2005年の参加以来ずっと入賞でぎずにいましたが、3年前に初優勝を飾ることができました。今年度久々に3位を獲得することができました。また、コンテストに先立って開会式で行われるCompetition of Jubilatingでは惜しくも3位でした。参加者は、2A宮本亮吾、2E清水理愛、2H市川実花、3A金子奈央、3F水越百香、3G飛知和志帆です。



◇「慶應義塾大学医学部紀要」掲載

3B 中川 慎一郎君の論文が慶應義塾大学医学部紀要に掲載されました。
この研究は、慶應義塾大学「世界の医療を切り拓く君・自我作古」プログラム(独立行政法人科学技術振興機構「グローバルサイエンスキャンパス次世代科学者育成プログラム」事業)に応募した中川君が、全国の応募者から1次選抜者70名の中に残り、その中からさらに15名の最終選抜者に残ったことからスタートした研究が発端となっています。2014年から2016年にかけて、慶應義塾大学医学部で研究した論文が筆頭著者として慶応義塾大学医学部紀要に掲載されました(査読付き)。この論文は、2011年の福島原発の事故が原因で水中にイオン化して存在している放射線セシウムを濃縮除去する装置の開発について書かれており、ポリスチレン系陽イオン交換膜で回収および濃縮をできることを明らかにしたものです。

◇総務省「異能vationプログラム」採択

三宅智之君(1H)が、総務省「異能vationプログラム」平成28年度の最終選考通過者に決定し、10月21日(金)に総務省で行われた記者会見に出席しました。この「異能vation」プログラムは、ICT(情報通信技術)分野に関する独創的な人材の創出を目的としたもので、今年度の応募総数1218件の中から、一次選考の29件(28名)に残り、最終選考で10名が採択され、そのうちの1名に選ばれました。採択された技術課題名は「CGを用いた建物破壊映像におけるリアリティの追求とその制作過程及びモデリングデータの公開」です。